



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	直観と道徳的判断に対するピーター・シンガーの立場とその補完 : 道徳的正当化を中心に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	金, 雲龍
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16482号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94854
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Woonyong_Kim_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：金 雲龍

学位論文題名

直観と道徳的判断に対するピーター・シンガーの立場とその補完：

道徳的正当化を中心に

・本論文の観点と方法

本論文の目的は、現代の代表的な倫理学者の一人であり、功利主義者であるピーター・シンガー (Peter Singer) の道徳的正当化の方法を検証し、それを補完することである。シンガーは道徳の起源として直観を利用して自らの倫理原理を擁護しているが、道徳の起源としての直観はなぜ道徳的に正当化されるのかについての研究が必要だと金氏は考えている。

功利主義の基本的な主張は、全体の善を増進することを行為の目的とするべきだということであるが、それならなぜ自分の利益や自分に近い人の利益ではなく、全体の利益を優先すべきなのかを説明できなければならない。また何が正しいか、あるいは間違っているのかを認識する能力について研究する必要もある。そこでシンガーは著書 *The Expanding Circle* など道徳的直観についての進化生物学的・心理学的な研究成果を自分の理論に適用し、なぜ利他性が今まで消えなかったのかを説明している。またシンガーの中心的な主張は、「利益に対する平等な配慮の原理」「博愛 (benevolence) の原理」「不偏性 (impartiality)」などにまとめることができるが、シンガーはこういった原理について説明しようとする。

一方シンガーは自然主義的誤謬の概念に訴えて事実と価値を明確に区別しようとする。直観と道徳的判断の科学的な研究結果を利用し、感情を根拠に倫理を正当化するのは間違っており、理性に基づくべきであると主張する。

シンガーは、科学あるいは進化生物学は、なぜある行為をしたのかを説明できても、特定の規範的主張や規範理論を正当化することはできないと主張する。では、シンガーが科学に基づき自分の倫理学理論を提唱することを、どのように理解するべきなのであろうか。シンガーの研究について論じることは、科学を哲学に適用する上でいかに境界線を引くべきかについての一つの答えになると金氏は考える。

またシンガーは自然主義的誤謬を理性で解決しようとする。シンガーは、理性は人間が進化を経て発展する能力ではあるが、予期できないところまで我々を導くという特徴を持っているため、進化に逆らう行為も可能になったと主張する。シンガーによれば、理性はただ自然なものではなく、遺伝子の支配を受けないため、自然主義的誤謬に陥らないことになる。また金氏はシンガーの理論の中では感情が規範的に扱われているとする。本論文で、金氏はこのようなシンガーの主張を批判的に検討している。

・本論文の内容

本論文の第1章と第2章では、ジョン・ロールズが提唱した正当化の方法である反照的均衡とそれに対するシンガーの批判について論じられる。シンガーは反照的均衡は道徳的判断を直観に基づけるものであり、道徳的正当化の方法としては適当ではないとする。

第3章では19世紀の倫理学者シジウィックに対するロールズとシンガーの解釈の違いについて論じられる。ロールズはシジウィックが『倫理学の方法』において反照的均衡の方法を使用したと考え、常識道徳を根拠に功利主義を正当化していると考えている。これに対し、シンガーはシジウィックは直観を根拠に導き出した公理に功利主義を基づけることで功利主義を展開したが、シジウィックが行ったのは正当化作業ではないとする。

第4章では、シンガーが科学と倫理学をどのように扱っているかが論じられ、記述の領域と当為の領域がどのように区別され、使用されるべきかが論じられる。反照的均衡は記述的作業であり、我々が一般的に道徳的判断を下す過程を説明できるかもしれないが、それが倫理的に正しいかどうかについては説明できないとシンガーは主張したとされる。

第5章では、直観と道徳的判断に関するシンガーの立場に基づき、ジョナサン・ハイトとジョシュア・グリーンの理論が比較される。しかし、シンガーの立場では科学研究は事実に属し、これを根拠に倫理原理を導き出すと自然主義的誤謬に陥るので、そういった研究の結果は倫理原理を正当化できないとされる。

第3部では、直観に対するシンガー自身の主張について批判的に考察される。シンガーは正義感覚が自然に与えられたものであることを認めており、それを進化生物学の観点から証明しようとしている。金氏は第3部で主に二つのことを主張する。第一に、シンガーは直観よりも理性に倫理的正当性を与えているにもかかわらず、シンガーは依然として特定の種類の直観を重要視している。進化的に生き残った自然な互惠性あるいは正義感覚に訴える限り、シンガーは自然主義的誤謬を完全に克服したとは言えないと金氏は主張する。シンガーは、直観に相当する互惠性を理性的に考察し、不偏性に訴える方法によって道徳的正当化を試みている。しかしシンガーは利益を公正に分かち合う互惠性だけを考慮しており、利益に関係なく関係を持続させるような互惠性は考慮していない。金氏は、シンガーは理性ベースの互惠性だけでなく、感情ベースの互惠性も正当化しなければならないと主張している。

第6章では、進化生物学について簡単に説明され、進化生物学に基づいて倫理学を展開しようとする際に、自然主義的誤謬に陥らない方法を考慮する必要があるとされる。

第7章では、シンガーが進化生物学を使用する方法について論じられ、シンガーがどのように自然主義的誤謬を克服しようとしているのかが論じられる。シンガーは互惠性がどのように進化したかについて論じる。しかし、人間と非ヒト動物の行動に互惠性が見られるからといって、これをそのまま正当化すれば、自然主義的誤謬に陥る。だがシンガーによれば理性は自然なものではなく、遺伝子の支配を受けないため、自然主義的誤謬に陥らない。

第8章で、金氏は進化生物学的観点から共感と感情に訴える方法を検証し、シンガーの立場を批判する。また、互惠性は計算された互惠性と感情的(態度的)互惠性に分けられるが、金氏はシンガーが計算された互惠性だけでなく、感情的(態度的)互惠性にも基づくべきであると主張する。

第4部では、シンガーとウィリアム・マッカスキルの効果的利他主義(Effective Altruism: 以下、EA)を比較し、シンガーがEAを規範的に定義する理由について論じられる。シンガーはEAで認知的共感を受け入れるが、感情的共感を受け入れない。だが認知的共感に従うなら自然主義的誤謬に陥り、シンガーが感情的共感を受け入れないことは正当化できないと金氏はシンガーを批判する。シンガーの理論の中で感情は規範的に扱われており、その規範性を認めることによってシンガーの道徳的正当化の方法は正しいものになると金氏は主張する。

第9章では、シンガーとマッカスキルが主張するEAの違いについて論じられる。マッカスキルがEAを非規範的に定義するのに対し、シンガーはEAを規範的に定義しているが、EAを非規範的に定義することは望ましくない理由について説明される。

第10章では、シンガーがEAを規範化する方法について論じられ、その方法が正当かどうかを検証される。そしてシンガーが博愛の原理の根拠として提示した、理性に基づく非互惠的利他性について説明され、シンガーは、非互惠的利他性は理性で正当化できるとするが、非互惠的利他性は感情とより深く関係している。またシンガーがEAを密教的道徳として正当化する際に、直観の客観的要素としての常識道徳を規範化していると金氏は主張する。